

原 明美(音楽評論家) Akemi Hara

J.S.バッハ：イタリア協奏曲 ヘ長調 BWV971

バロック時代のドイツが生んだ大作曲家、J.S.バッハ(1685～1750)の「クラヴィーア練習曲集第2部」(1735年出版)に収められたこの曲は、正式な題名を「イタリア趣味による協奏曲」という。但し、今日でいう独奏楽器とオーケストラのための協奏曲ではなく、協奏曲の演奏効果を取り入れた独奏曲である。バッハは青年時代から、ヴィヴァルディの器楽協奏曲に代表されるイタリアの様式に接してきたが、この作品は、その様式の最も完成された例であり、テンポの図式が急～緩～急となる典型的なイタリア風協奏曲の楽章構成による。さらに、tuttiと記された主要楽節がforte(強く)、soloと記された副楽節がpiano(弱く)として、当時の2段鍵盤のチェンバロで効果的に表現できるように作られている。

第1楽章：ヘ長調。速度表示はないが、快活で華やかな楽章。

第2楽章：アンダンテ、二短調。弦楽合奏の伴奏の上で旋律楽器が歌っているかのような美しい楽章。

第3楽章：プレスト、ヘ長調。ロンド風の構成により、技巧的な場面が続く。

モーツァルト：ピアノ・ソナタ 第10番 ハ長調 K.330

音楽史上でも傑出した天才だったW.A.モーツァルト(1756～91)は、ピアノ・ソナタについては19曲ほど残した。K.330は、1778年の夏にパリで作曲されたと考えられてきたが、近年の研究によれば、早くとも1780年の夏、ザルツブルクでの作と推定されている。しかし、その事情はともかく、この3楽章制のソナタは、フランス風の洗練された情趣を運び、また、やや小さめの規模ながら、豊かな表現性と流麗な美しさに満ちている。

第1楽章：アレグロ・モデラート。ハ長調、ソナタ形式。

第2楽章：アンダンテ・カンタービレ。ヘ長調、3部形式。

第3楽章：アレグレット。ハ長調、ソナタ形式。

ショパン：バラード 第2番 ヘ長調 Op.38

ポーランド出身のロマン派の作曲家、F.ショパン(1810～49)の作品は、大半がピアノ曲だった。元来「物語詩」を意味するバラードは、文学の形式として、また、音楽では歌曲の分野で用いられたが、初めてピアノ曲に採用したのはショパンだとされる。彼の残した4曲のバラードは、文学のバラードの持つ「物語」としての特色も含んでおり、同郷の詩人A.ミツキエヴィチの叙事詩にヒントを得たと考えられている。

バラード第2番は、1839年に完成され、作曲家R.シューマンに献呈された。互いに対照的な二つの部分が交互に現れ、静かなコーダで終わる、という構成で書かれている。関連があるとされるミツキエヴィチの詩は、「シヴィテシ湖(別名ヴィリの湖)」という。この湖は、ダッタン人の征服者に攻め囲まれた町にあり、町の乙女たちは、彼らの言いなりになるよりは死を選ぼうと、天に向かって死を乞うた。すると地面が割れ、乙女たちは湖にのまれたが、天の力で湖岸の花に形を変えられ、この花に触れた征服者は不幸な運命をたどった、という物語である。

スクリャービン：ピアノ・ソナタ 第5番 Op.53

ロシアの作曲家A.スクリャービン(1872～1915)は、ピアニストとしても活躍した。その作品の多くをピアノ曲が占めるなかで、ピアノ・ソナタは、遺作も含めれば12曲ほど残されている。1907年に作曲された第5番は、特に広く知られ、中期の傑作の一つに数えられる。単一楽章で書かれており、その構成は、序奏I→序奏II→主部→展開部→コーダ、となっている。調号は用いられているものの、ほとんど無調に近い響きであり、また、彼の考案した「神秘和音」などの急進的な書法も注目される。

ラフマニノフ：前奏曲集 Op.23より 第1番、第5番 前奏曲集 Op.32より 第12番

ロシア出身の作曲家S.ラフマニノフ(1873～1943)は、19世紀末から20世紀初頭にかけて最も活躍した名ピアニストの一人でもある。彼のピアノ曲は、自作自演を前提としたものが多く、高度な技巧が盛り込まれている。大きな手の持ち主だったことを想像させる広い音程なども、しばしば見られる。そのなかで前奏曲(プレリュード)は、「幻想的小品集」Op.3(1892年)の第2曲としてあるものと、Op.23(全10曲、1902年～1903年、第5番のみ1905年)、Op.32(全13曲、1910年)を合わせて、全部で、24の異なる調による前奏曲を構成している。今回は、次の3曲が演奏される。

Op.23-1：ラルゴ、嬰ヘ短調。陰影に富む分散和音の上で、哀愁を帯びた旋律が歌われる。

Op.23-5：アラ・マルチャ、ト短調。行進曲風のリズムと、情緒豊かな旋律との対比が効果的。

Op.32-12：アレグロ、嬰ト短調。ラフマニノフらしい哀愁を帯びた旋律が印象に残る一方、ロシアの寒々とした風景も想像させる前奏曲。

ラフマニノフ：ピアノ・ソナタ第2番 変ロ短調 Op.36(第2稿)

ラフマニノフは、ピアノ・ソナタについては2曲を残したにすぎないが、いずれも技巧的な作品であり、第2番では、ロシア風の哀愁を帯びたロマンティックな表現も味わい深い。1913年に完成されたこのソナタは、モスクワ音楽院時代の友人M.プレスマンに献呈され、ラフマニノフ自身のピアノによって同じ年に初演された。しかし、以後しばらくの間、演奏される機会に恵まれなかった。その理由は彼は、曲の長さにあると考えたらしく、1931年に、よりコンパクトな構成による改訂版を仕上げた。今回はこの改訂版(第2稿)に従って演奏される。曲は3楽章から成り、第2楽章と第3楽章は切れ目なく演奏される。

第1楽章：アレグロ・アジタート～メノ・モッソ。変ロ短調、ソナタ形式。第1主題は躍動的で力感に富み、第2主題は叙情的な味わいを持つ。特に展開部に、華麗な技巧がこらされている。

第2楽章：ノン・アレグロ～レント～ビウ・モッソ。ホ短調、3部形式。ラフマニノフらしいロマンティックな美しさの盛られた、歌謡的な緩徐楽章。

第3楽章：アレグロ・モルト～ポコ・メノ・モッソ～プレスト。変ロ長調、自由なソナタ形式。ピアニスティックな華やかさがきわ立つと共に、ラプソディックな展開を特色とするフィナーレ。